

夷王山墳墓群調査概報

—昭和57年度町内遺跡詳細分布調査—



—昭和52年撮影—

1983・3

上ノ国町教育委員会

夷王山墳墓群調査概報

—昭和57年度町内遺跡詳細分布調査—

序

夷王山墳墓群は、史跡上之國勝山館跡の南西に位置し、古くから松前氏始祖、武田、蠣崎氏一族の墳墓と伝えられて参りましたが、その全容は明らかとはいえませんでした。

当町教育委員会では、昭和 54 年度から勝山館跡の環境整備事業を推進しているところでありますが、その保存管理計画書において本墳墓群についても整備対象地区にすべきことが明記され、その実現の早いことを願っていたところであります。

幸いにして北海道教育委員会の御助力を頂戴し、格別の理解をもって、文化庁の補助事業として、昭和 56 年度から詳細分布調査を実施するところとなりました。

これに従い分布調査と一部確認調査を実施したところでありますが、本書はその概要をまとめたものであります。

58 年度においても残された周辺の確認調査等を実施し、過去の諸資料も追求し、墳墓群の全容解明に努力する予定であります。

諸先学の方々のご指導をお願い申し上げます。

昭和 58 年 3 月

北海道檜山郡上ノ国町教育委員会

教育長 青 柳 隆

本文目次

1 調査、事業の概要	7
2 調査の方法	8
3 まとめ	9

挿図目次

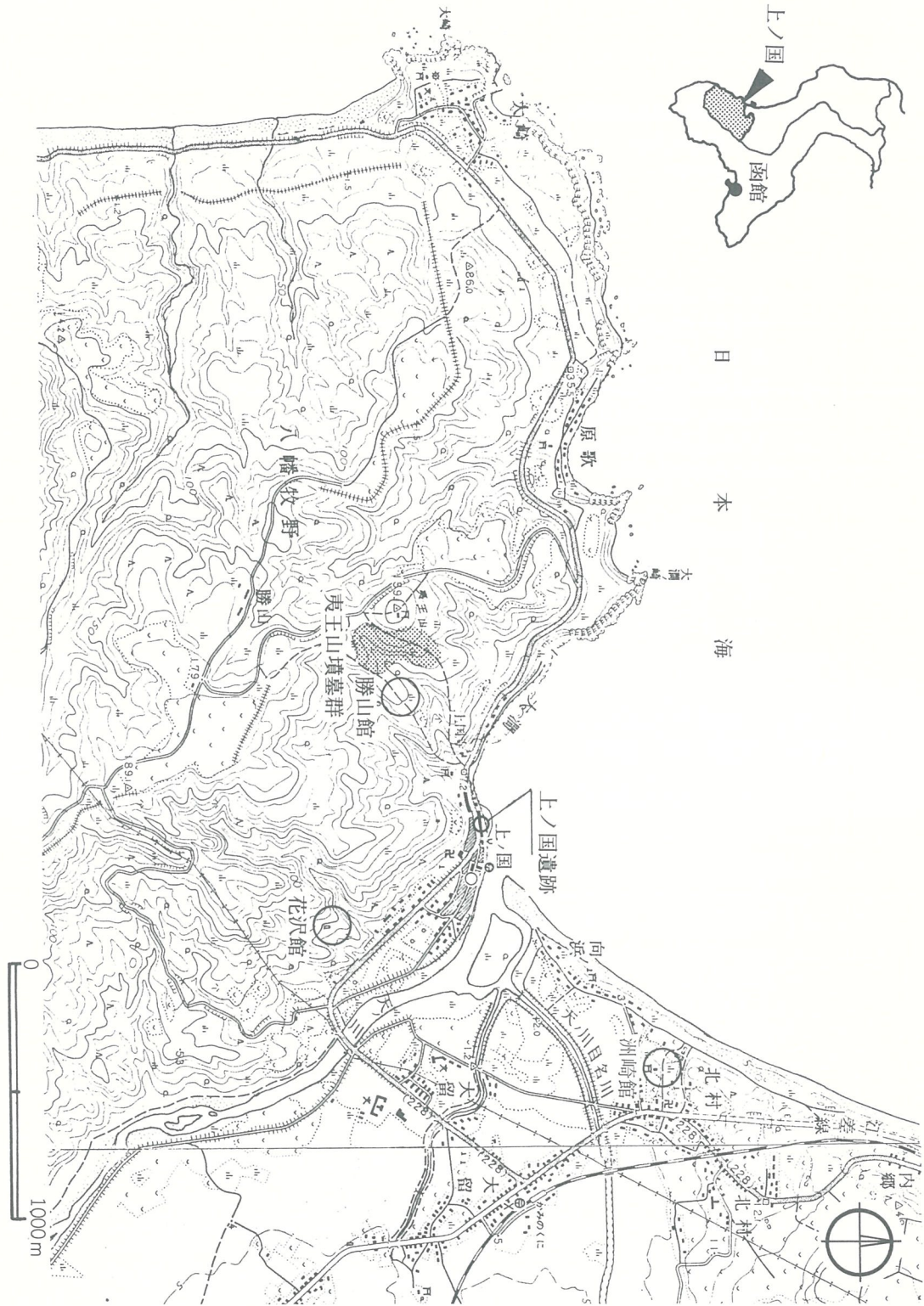
第1図 遺跡位置図	6
第2図 第III地区第174号墓コンター、プラン、セクション図	10
第3図 第III地区第174号墓遺物出土状況、出土遺物	11
第4図 第IV地区第20号墓コンター、セクション図	12
第5図 第IV地区第20号墓礫分布図	13

図版目次

PL. 1 航空写真	14
PL. 2 第III地区第174号墓	15
PL. 3 第IV地区第20号墓	16
PL. 4 第III地区第174号墓出土遺物	17

例 言

- 1 本書は夷王山墳墓群（C-04-02）の昭和57年度町内遺跡詳細分布調査事業について概要をまとめたものである。
- 2 本事業は文化庁の補助を受け、上ノ国町が事業主体となり実施した。調査には次の体制でのぞんだ。
調査主体者 上ノ国町教育委員会 教育長 青柳 隆
主管 上ノ国町教育委員会文化課 課長 山本吉春、調査員 松崎水穂（担当者）、前田正憲、藤田登、斉藤邦典
- 3 本書の作成は、松崎、前田が行い、分担を文末に記した。挿図の作成は前田が行った。
- 4 遺物の写真撮影は藤田が行った。
- 5 挿図中に示した方位は磁北である。
- 6 調査にあたっては土地所有者草間恒二、笹浪兵二、中村広、古川善作、松前神社、森兼夫、森定蔵、米沢光一、若狭義祐の各位から御理解と御協力を賜った。又、地元作業員の助力を得た。
- 7 事業の推進にあたっては、次の関係機関と各位から多大の御指導と助力を頂戴した。
文化庁記念物課 仲野浩・河原純之・黒崎直、北海道教育委員会文化課 竹田輝雄・酒向憲司、東洋文庫 渡辺兼庸、明治大学考古学研究室、坂順一



第1図 遺跡位置図

1 遺跡、事業の概要

北海道南西部渡島半島は渡島山地と呼ばれる標高 1,000 m 前後の山地が脊梁をなしている。この脊梁山地の南端大千軒岳から北東へ連なる分水界の一、稲穂峠に源を発する天ノ川が上ノ国の北部を東から西に貫流し日本海へ注いでいる。天ノ川の河口には大淵湾が形成され、無錨(みょうかり)と俗称される上ノ国漁港となっているが、この汀線から南西 500 m 余の所に標高 159.07 m の夷王山がある。遺跡はこの夷王山の北東～南東麓の台地及び斜面に位置する。標高 98 m～136 m、汀線迄の距離 300 m～600 m。6 地区にわたり合計 622 基余の墳墓から構成される。第 1 地区は史跡上之国勝山館跡指定範囲南西界に接し、第 IV 地区は同じく西界の一部に含まれている。その立地は勝山館跡後方をとり囲む形となっており、勝山館館主とされる松前氏始祖武田信広の埋葬を伝える記述と付合する。

本遺跡の調査は昭和 27 年明治大学考古学研究室、同 39 年北海道教育委員会の委託により北海道文化財保護協会が、分布と発掘を実施した。

昭和 27 年の調査結果はミクロリス第 8 号に掲載されている。その一部は上ノ国村史、続上ノ国村史で紹介されている。昭和 39 年の調査結果は文化財保護委員会宛に提出された夷王山墳墓群発掘調査概要報告書及び日本考古学年報 17 に掲載されている。

墳墓の形状は、直径 1.2～7.5 m の円形ないし楕円形で、0.2～1.0 m の高さを有する盛り土の墳丘である。第 I 地区は史跡上之国勝山館跡南西端に接する標高 104～136 m の南西から北東へのびる台地で 115 基の墳墓からなる。第 II 地区は夷王山南麓に位置し標高 113～129 m の西から東へのびる緩斜面で 113 基の墳墓からなる。無名沢を介して東で第 I 地区と接している。第 III 地区は夷王山南東麓の標高 106～131 m の南東へのびる斜面で 216 基の墳墓からなる。無名沢を介して南で第 II 地区、南東で第 I 地区と接している。第 IV 地区は夷王山の南東麓標高 98～125 m の東へのびる斜面で、76 基の墳墓からなる。無名沢を介し南西で第 III 地区と接する。東端は史跡上之国勝山館跡

指定地区内に含まれる。第 V 地区は夷王山東麓の北東へのびる標高 112～123 m の台地とその東、標高 102～114 m の斜面で 83 基の墳墓からなる。寺の沢を介して勝山館と対している。第 IV 地区の北東に位置する。第 VI 地区は夷王山北東の中腹、標高 122～134 m の斜面で 19 基の墳墓からなる。第 V 地区の西に位置している。

発掘調査の行われた墳墓の基数は、昭和 27 年 6、昭和 39 年 10、昭和 57 年 9 の計 25 基である。調査対象地区は、昭和 27 年第 I、II 地区、昭和 39 年第 I～III、V、VI 地区、昭和 57 年第 I～VI の各地区である。

上ノ国町教育委員会では、昭和 52 年に勝山館跡と花沢館跡が史跡に指定されたのを機に史跡公園としての整備を計画し、昭和 54 年度から 10 カ年計画で勝山館跡の環境整備事業を実施している。

夷王山及び夷王山墳墓群については、勝山館館主武田信広の後裔、蠣崎、松前氏の崇敬の状態等から勝山館跡と関係することが想定されてきた。

勝山館跡の周辺踏査を行う中で従来夷王山墳墓群として周知され、北海道指定史跡として指定されていた範囲外にも同様の形状の盛り土を発見するにいたった。又、土地所有者等の町民からも、かつての耕作、植林時等に墓らしいものを見ているとの話を聞くことが出来た。

この為、上ノ国町教育委員会では、墳墓群の分布範囲、基数等の確認と、併せて勝山館との関係を明らかにすることを計画した。

北海道教育委員会の力添えを得、昭和 56 年度から文化庁の補助を受け本事業を実施するところとなった。

56 年度は周知の範囲も含め夷王山の山裾から勝山館史跡指定南、及び南西界の間一帯の伐開分布調査を行なった。この結果従来 4 地区に 131 基知られていたものが上述の如く 6 地区 622 基を数えるにいたった。

57 年度はこれらのうち新たに発見された墳墓を対象に発掘を行ない確認を行なった。

(松崎水穂)

2 調査の方法

墳墓の調査方法は、墳丘部の草薙りを行ない墳丘部を5 cm 間隔のコンター図を作成した。墳頂の標式クイを中心とし主として磁北に合わせて十字に直交するラインを設定し、市松に調査を進めた。遺物はすべて平面実測を行ないレベルを落とした。

調 査

今年度は、6 地区に分散する墳墓群の各地区ごとに1基ないし2基の墳墓を調査し、計8基の墳墓の調査を目的とした。

第I地区では第1号墓と第109号墓の2基。第II地区では53号墓の1基。第III地区では第174号墓の1基。第IV地区では第20号墓と第74号墓の2基。第V地区では第15号墓の1基。第VI地区では第5号墓と第6号墓の2基。以上合計9基を調査した。

この結果、墳墓と認められたものは第I地区の第109号墓。第II地区の第53号墓。第III地区の第174号墓。第IV地区の第20号墓と第74号墓の合計5基であった。

なお第V地区の第15号墓は、人為的な落ち込みが認められたが墓とは決定しがたく、他地区のものは風倒木痕である可能性が高い。

第III地区 第174号墓

第III地区北東テラス上に形成され、標高は約115 mである。ほぼ円形を呈するマウンドの直径は1.8~2 mで、周囲との比高差は5~30 cmを計る。マウンドは主に山側の土を削り形成されたものと考えられる。

墓壇を有し、その規模は約140×130 cmの隅丸方形を呈し、長軸はN 35° Eを示す。掘り込み面は基本土層の第II層である明褐色土上面であり深さは30~60 cmを計る。底面の一部は基盤まで達する。埋土は褐色土で、中央部がやや窪み暗褐色土がレンズ状に堆積する。さらに灰白色火山灰を被る。

墓壇の底面はほぼフラットであり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。また壁ぎわに浅い溝が全周する。

出土遺物は埋土より釘19点であり、他に小礫が多数検出された。

釘は、木棺の四隅と考えられる地点よりそれぞ

れ4ないし5本ずつ出土し、底面より出土した釘は、木棺の長軸に対しがいに内側を向く。四隅の釘の位置から想定すると棺の大きさは約100×70 cmとなり、棺の高さは釘の出土状態より、40ないし50 cmほどのものと考えられる。また、多くの釘は底面より出土した釘を結んだラインより内側から出土する。

釘は合計19本出土した。このうち完形品は4本であり、残りの多くは先端部あるいは頭部を欠損する。完形品の大きさは6 cm前後(約二寸)のものが多く、また釘に付着する木質部は、頭から2 cmぐらいまでは横方向に木質部が残り、そこから先端部までは縦方向に木質部が残る。

第IV地区 第20号墓

第IV地区のほぼ中位に形成され、標高は117 mである。ほぼ円形を呈するマウンドの直径は2.5~3 m、周囲との比高は15~30 cmを計る。マウンドは主に山側の土を削り形成されたものと考えられる。表土を剥ぐと火山灰が部分的に在り、薄い間層をはさみ墳頂部の主として南側に直径1~1.5 cmほどの扁平な小ジャリを約2 cmほどの厚さに敷く。また第5図の礫分布図で、I a.b層の礫はII層の礫と比べて墳頂部に集中する傾向があると言える。つまりI a.b層は盛り上げ土なのである。

墓壇は無く、マウンド中央部に基本土層のII層を大きさが24×14 cmぐらいで深さ約10 cmほどの小穴を掘り焼骨を埋葬する。

ま と め

今年度の墳墓群の調査では、火葬墓3基と土葬墓2基が確認された。これまでの火葬墓例は、すべて骨蔵器を伴わず⁽¹⁾、マウンド中央の地表から深さ10~20 cmほどの所に焼骨が集中して分布する。この場合、ゆるやかな窪地に散布するものと10 cmほどの深さの小穴に集中するものがある。火葬骨はそのほとんどが粉末状態で、部位の判りそうなものは数片しか無い。

さて土葬墓例であるが、副葬品を有する(六道銭)ものと、全く無いものがある。墓壇のプランは隅丸方形あるいは隅丸長方形を呈する。斜面に構築される場合は一般に浅く、平坦地では深い。

釘の出土状態もバラツキがあり、ほぼ完全に出土したのは一例である。この場合、四隅の横板を打付ける分の釘だけで、底と蓋を取り付ける方法は不明である。
(前田正憲)

註

1 1例だけ木製の小箱に収めた可能性のありそうなものもある。

3 まとめ

56年度の分布調査によって従来五地区にわたって131基の墳墓からなるとされてきた本遺跡は、六地区に約その5倍の基数をもって構成されていることがあきらかとなった。

又、57年度の発掘調査の結果、火葬墓としてその特徴づけをされてきた本墳墓群中に土葬墓のあることが確認された。これは56年度勝山館跡において土葬墓が41基検出されていることも併せて、今後検討していかなければならないことである。

尚、本墳墓の分布範囲については、夷王山北300m余、標高105mの台地上にも見られたとの事であるが、草地改良の行われたこともあり、現在は明らかになし得ない。

本遺跡は勝山館跡と極めて近接した位置関係にあり、松前氏始祖武田信広は上ノ国で没していること、松前家歴代の墓所にその草創の諸代の墓が

ないこと、松前氏は墓末迄上ノ国を祖廟の地として崇敬し、藩主や家臣の参詣することが慣例化されていたこと、等から、武田信広を含めた蠣崎氏等、松前氏草創に連る諸氏の墳墓とすることができ、史跡上之國勝山館跡と密接な関係を有する遺跡と推定される。館跡に付随する、600基余の墳墓の存在は極めて稀であり貴重な遺跡と考えられる。

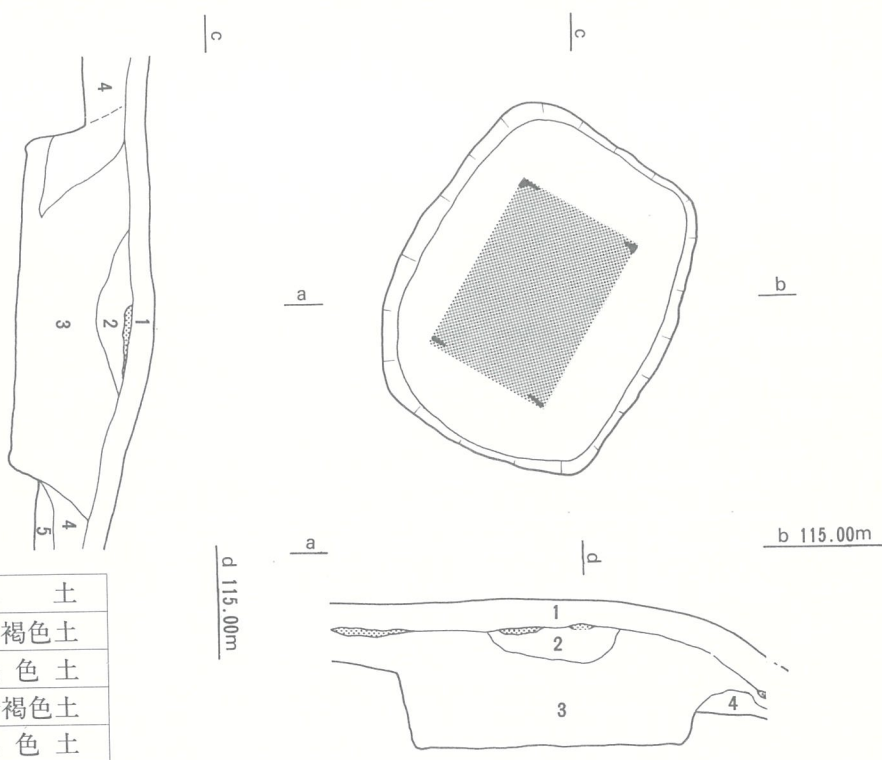
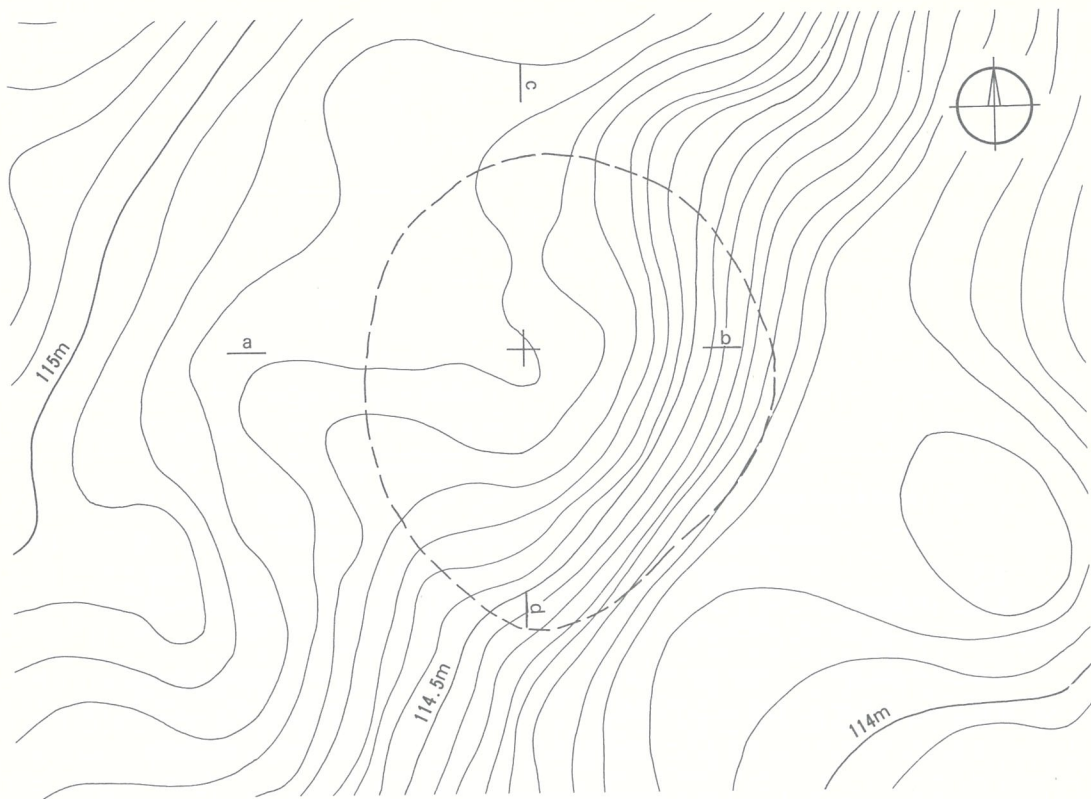
いずれにしてもその解明は勝山館のそれと共に行なわれる必要がある。

尚、58年度においては墳墓群各地区及びその周囲で認められた旧道状凹みについて更に調査を行い墳墓との関係や更には、勝山館跡と墳墓群との関係等をより明らかにするとともに、過去の調査例も併せて本墳墓群の内容を整理し、今一度上述の事項等につき検討を加える予定である。

(松崎水穂)

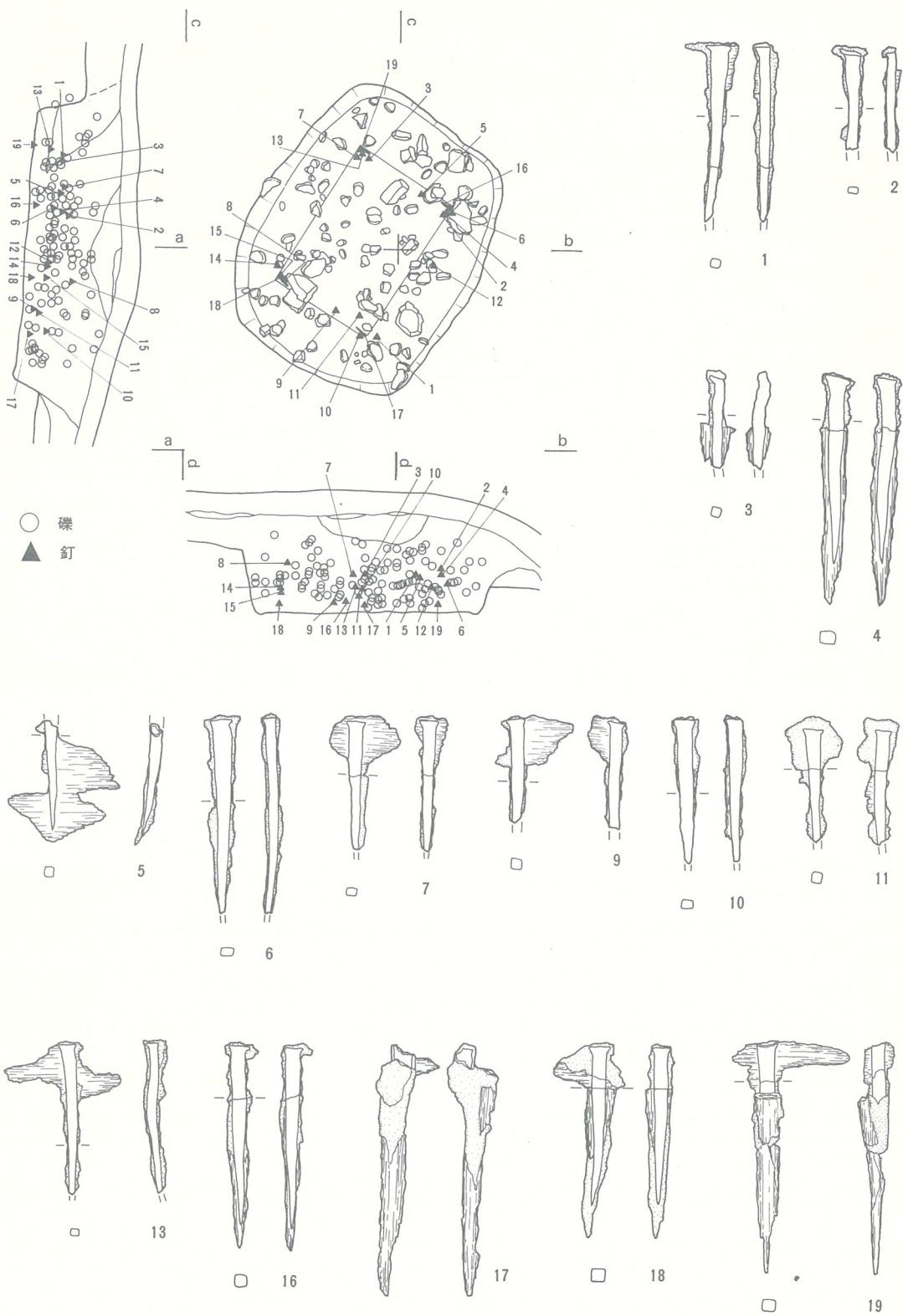
参 考 文 献

- 松前家記 新井田千里 1880
北海道史蹟名勝天然記念物調査報告書 河野常吉 1924
渡島国桧山郡上ノ国村墳墓群についての一考察 坂順一 ミクロリス 8 1953
上ノ国村史 上ノ国村 1956
続上ノ国村史 上ノ国村 1962
夷王山墳墓群発掘調査調査概要 上ノ国村教育委員会 1965
上ノ国への和人定着年代について 永田富智 新しい道史 27 1968
北海道桧山郡上ノ国夷王山遺跡 大場利夫 日本考古学年報 17 1969
北海道 加藤邦雄 新版仏教考古学講座 第7巻 墳墓 1975
夷王山周辺古墳墓(1)~(3) 宮下正司 広報かみのくに 上ノ国町 1975

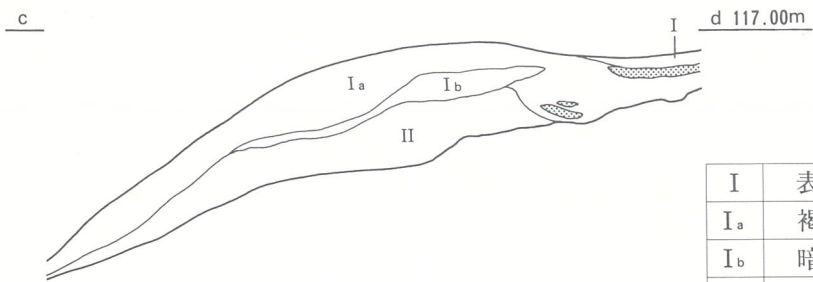
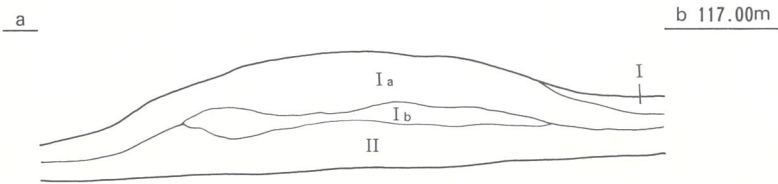
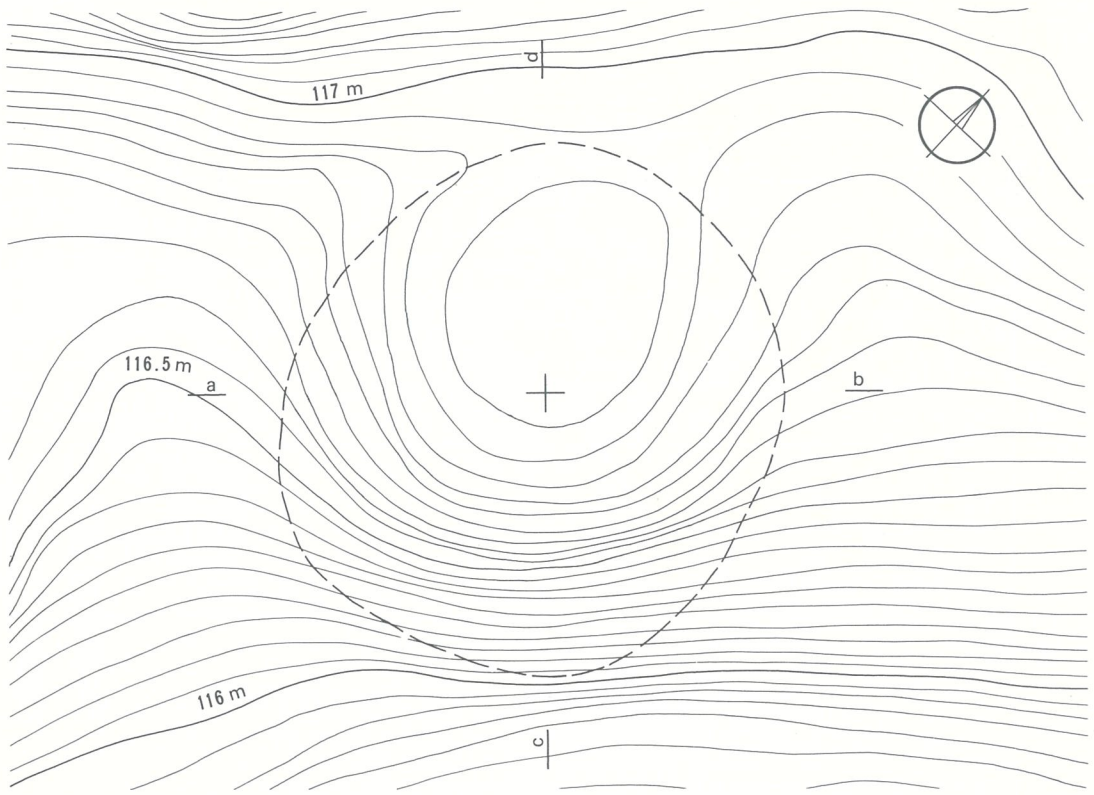


1	表 土
2	暗褐色土
3	褐色土
4	暗褐色土
5	黒色土

第2図 第三地区第174号墓コンター・プラン・セクション図

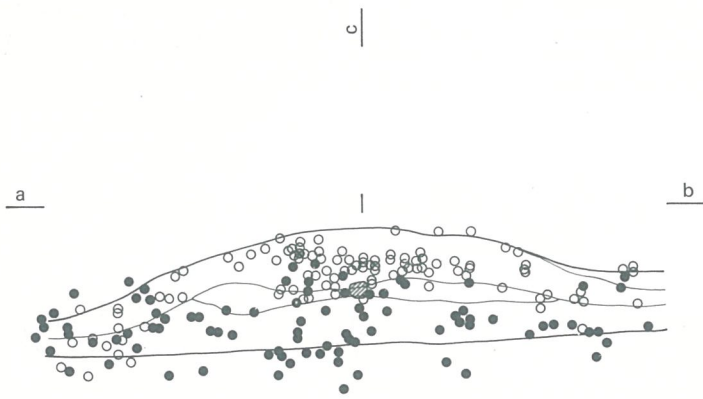
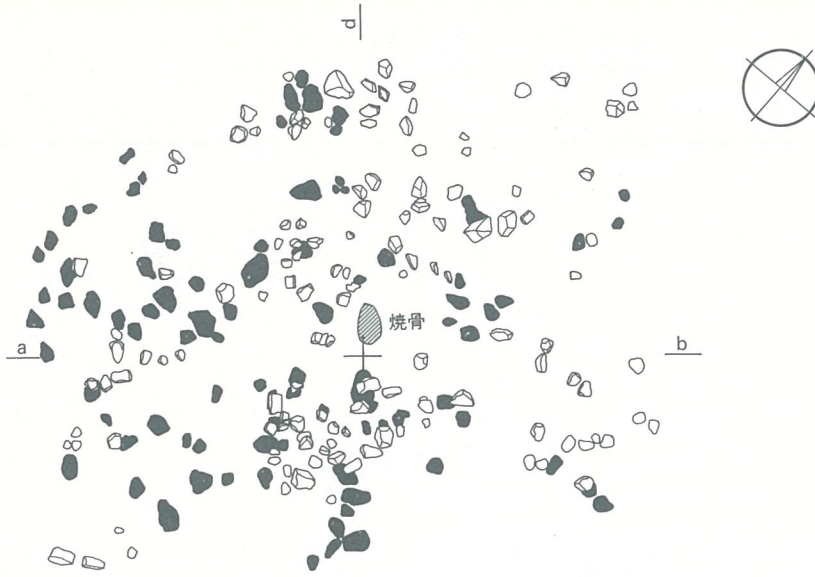


第3图 第三地区第174号墓遗物出土状况·出土遗物



I	表 土
I _a	褐色土
I _b	暗褐色土
II	明褐色土

第4図 第IV地区第20号墓コンター・セクション図



○ I a,b 層中出土の礫
● II 層中出土の礫

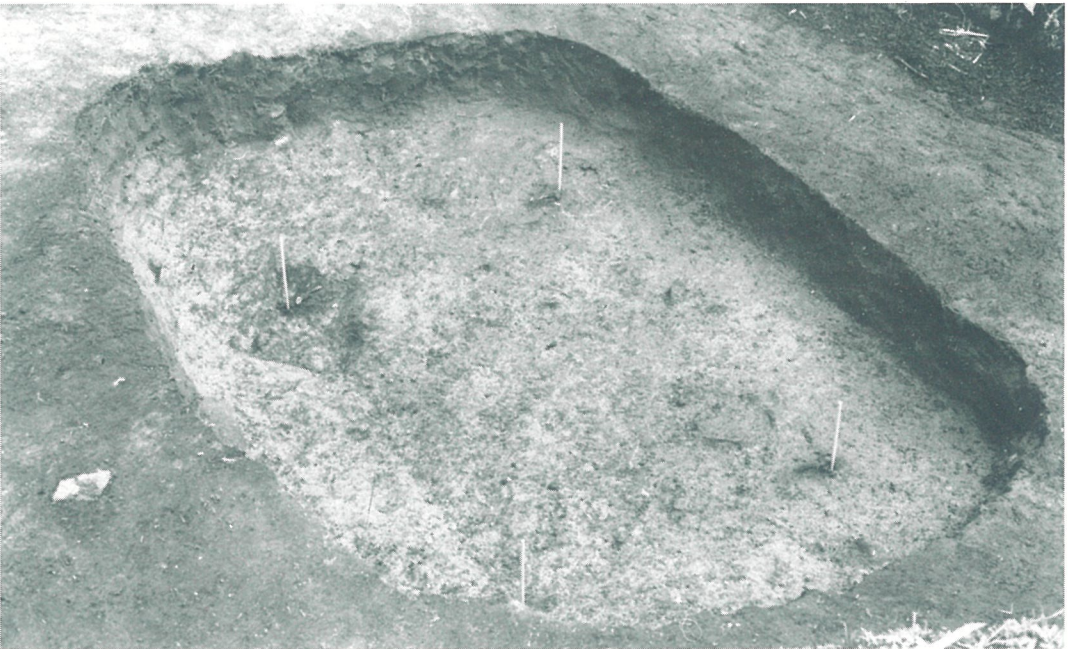
第5図 第IV地区第20号墓礫分布図



PL. 1 航空写真(56年11月撮影)

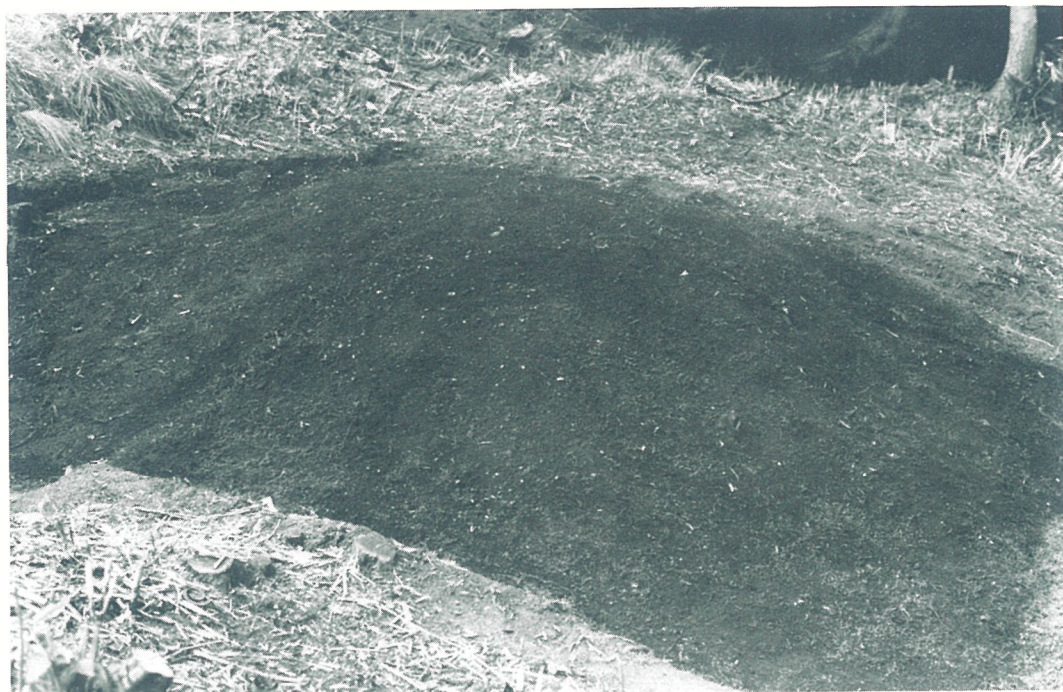


調査前



調査後

PL. 2 第Ⅲ地区第174号墓



調査前



調査中

PL. 3 第IV地区第20号墓



PL. 4 第Ⅲ地区第174号墓出土遗物

夷王山墳墓群調査概報

—昭和57年度町内遺跡詳細分布調査—

発行 上ノ国町教育委員会

印刷 昭和58年 3月25日

発行 昭和58年 3月31日

印刷所 (協)高速印刷センター
